

此の地は笹ヶ町の末にて、野田寺町の後の地なり。舊傳に云ふ。昔は金澤地邊にて茶を製する事甚だ稀なり。茶畠は此の地と野田村との兩地のみなり。故に茶畠とて地名に呼べりとぞ。さて後には茶畠を廢し邸地となし、茶畠を町名に呼びたるなり。

○茶畠事略

加賀國の諸郡郷里に茗茶を培養する事、舊藩國初の頃は更なり。後々もいと稀なりけん。當國にての煎茶を製造するは、小松茶とてその製甚だ鹿なりといへども、之を最とせり。この小松茶は能美郡今江の邊に作られたり。寶曆十四年郡方舊蹟產品等調書に、能美郡今江村・猿馬場村・矢崎村・符津村邊、茶木植申様に微妙公被仰付。夫より御郡之内所々畑地に茶出來仕。と載せたり。されば小松邊の茶畠も、利常卿小松に在城し給ふ頃茶木を殖えしめられ、それよりして諸郡郷里にも茶木を培養する事と成りたりしとぞ。微妙公は、山本基庸の夜話録に、鷹野に御出の時分、御乗馬の足音にて、此所は上田此所は下田也と被仰故、相尋候へば無相違のよし、宮井彦九郎叫仕。と見え、また江戸より

御歸國の時、越中白石村の内御通行の頃、百姓居屋敷の邊にほうき木を畠に植置けるを御覽被成、殊の外御機嫌惡敷、郡奉行・改作奉行共合点せぬゆゑとて、御わめき被成たるよし、山本瀬兵衛語り申。とあり。右等の事共に考ふれば、小松邊の畠地に茶木を植えしめられしも、微妙公の土地を見立て給うての事ならんか。改作所舊記に載せたる寛文十一年四月郡方への達書に、下畠にて耕作不出來之處は、桑・茶・えん・かうす其の外木苗を植ゑ、たそくに成候様に可仕。とありて、石川郡野田村、さては此なる茶畠の地などに茶木を植ゑ初めたるも、若しくは右寛文十一年の布達よりの事にてもあらんか。是もそのかみ利常卿小松に在城し給ふ頃、小松邊の近邑今江村等へ植ゑしめられしゆゑ、追々諸郡郷里へおよぼし給ひたるものなりしと聞ゆ。然るに、明治廢藩置縣後は、茶木或は桑・楮など邸地はさら也。今は上田にも植うるやうに成りたりしかど、上田にかゝるものを植うるは、彼の越中白石村の屋腰なるほうき木にひとしといふべし。

○山中一夢庵跡

加藤惟寅の蘭山私記に云ふ。泉野寺町に先年山中一夢と云べる風雅の隱遁者住み居たり。手輕き小庵を結び、茶器をば一通り取揃へ、遊客に茶を振舞ひけり。其の人となり、清直にして氣性高く、庵室の景氣もよかりしゆゑにや、遊客の人々打錢をなし遊び所とはなしたり。一夢彼の小座敷の脇に瓢箪を釣りて、狂歌をば書付け置きたりけり。

ひやうたんのたんとならずばちとなりと

錢もてござれ御茶まうさう

或人添書して、

ひやうたんのたんより輕き身を持ちて

錢ほしがらはいちむさいこと

右は何れの頃ならんか、年曆時代も記載せざれば、考ふべきよしなし。何れ享保^(文)・元祿^(文)以往の人なりしと聞ゆ。むかしはかゝる雅人の隱士も居たるなるべし。さて右一夢の庵室ありしは、何れの地ならんか。今その遺跡詳かならずといへども、若しくは茶畠の地ならんか。故に爰に記載す。

○櫻 木

茶畠の末、野田寺町の裏地をば櫻木と呼び、今櫻木一ノ小路

より櫻木十ノ小路まであり。此の地邊は都て泉野新村の村地にて、昔は此の地より向うなる犀川河岸へかけ、都て櫻畠とて櫻木をば植ゑありしゆゑ、櫻木と稱したるものにて、元は櫻畠と一緒の地なり。或は云ふ。櫻木と呼べるは古名に非ず。其の名櫻木の八幡より起れり。舊藩中は此の地の組地をば櫻畠山方組と稱し、今いふ櫻畠の地なる組地をば櫻畠河方組と稱せりとぞ。

○櫻木神社

櫻木の八幡とも呼べり。此の神社は泉野新村に鎮座にて、六動林の町地等四百七十餘戸の産土神なり。龜尾記に、櫻木の八幡は、泉野新村なる櫻の四郎と字せる者の邸地に鎮座ありし故に、櫻木の八幡と云ふならんと。但し附會の妄誕なるべし。又同記に、櫻木八幡社の縁起は小立野岩倉寺にありといへり。實説ならんか。或は云ふ。此の神社は甚だ舊社にて、昔は別當の寺院もありしかど、亂世の頃絶えたりといひ傳へたり。今泉野新村に此の八幡と神明との兩神社ありて、神明社をば邑人方丈の宮と呼べり。いにしへ別當の寺院ありし頃、神明社は方丈の鎮守なりしゆゑ、方